

# まじんとやうぶんが

## 周辺民族を弾圧し拡張する 中国流ナショナリズムの正体

麻生晴一郎

あそう せいいちろう / フリージャーナリスト

### 中

国の北方、モンゴル国(旧  
モンゴル人民共和国)と

国境を接する広大な内モンゴル  
自治区は少数民族のモンゴル族  
が住む。彼らははれつきとしたモ  
ンゴル人であり、内モンゴルは  
もともと彼らが草原生活を営む  
場であった。

だが、近代に入ると、満州に  
野望を抱いた日本と、大量の中  
国人農民が入植し清朝崩壊後も  
軍閥が支配した中国の二重の植  
民地状態に置かれた。日本の敗  
戦後、内モンゴルではモンゴル  
人民共和国との統一を求める動  
きが生じたが、ヤルタ協定によ  
り中国に組み込まれる。以来、  
年々中国化が進んできた。

本書は内モンゴルが中国化し  
ていった歴史と、中国共産党の  
支配下で繰り返された大量虐  
殺やモンゴル人独自の生活や文  
化が奪われている現状を、日本  
で歴史人類学者として活躍する  
内モンゴル出身のモンゴル人の  
著者が、豊富な資料や現地の人  
々の証言をもとに詳細に描き、  
根本にある中国独特のナショナ  
リズムを分析したものである。

中国共産党は近代におけるモン  
ゴル人の民族自決の動きを中国  
革命の一部に位置づけるなど歴  
史の改竄を行ない、モンゴル人  
が中国共産党支配を喜ぶイメー  
ジ作りをする一方、民族独立の  
主張を「国家分裂」として弾圧  
してきた。立ち遅れた少数民族  
を解放する名目で大量の中国人  
を入植させて草原の砂漠化を進  
め、モンゴル人を底辺の住民と  
して定住化に追いやり、伝統文  
化を学ぶ機会を奪った。

周辺民族に対する中国の支配  
は伝統的な華夷思想などと呼ば  
れ、帝国主義の植民地統治とは  
別物に扱われてきた。だが、は  
たしてそうなのか。中国が内モ  
ンゴルで行なってきたことが植  
民地統治にほかならないとする  
著者の主張には説得力がある。

同時に本書は日本人の中国に  
向ける眼差しにも注意を促す。  
たとえば、二年前の辛亥革命一  
〇〇周年の際、日本人が孫文を  
支援したことはひたすら好意的  
に取り上げられた。だが、内モ  
ンゴルの人から見た孫文の革命  
とは、満州人やモンゴル人を打  
ち倒す漢族ナショナリズムの勃  
興にほかならず、内モンゴルの  
中国化を促進するものだった。

また、中国で「偽満州国」と  
言われる日本の満州統治は、日  
本人と漢民族との関係から見れ  
ば一方的に日本に非があるとと  
らえがちだが、満州国の統治は  
中国人入植者が推し進めた草原  
の開墾を禁じ、モンゴル人に教  
育の機会を与えるなど、モンゴ  
ル人にとって必ずしも悪いこと  
ばかりではなかった。他方で戦  
後、大勢の日本人が賞賛した中  
国革命は、内モンゴルなどで大  
量虐殺が行なわれ、中国化を進  
めたものでもあった。このよう  
に、日中関係を考える上でモン  
ゴルを視野に入れるか否かで評  
価は大きく変わる。

内モンゴルの中国化は日本の  
満州における歴史と深く関わり、  
経済協力などで中国政府を支援  
することが結果的に植民地統治  
を助長してきた面があるように、  
日本と無関係の問題ではない。  
まして本書が指摘するように、  
中国の周辺民族に対する圧力は  
年々激化の一途を辿り、それは  
尖閣諸島や沖縄をめぐる中国の  
動きとも連動している。

中国が過去も今も周辺民族を  
弾圧してきた面から目を背け、  
ひたすら中国政府相手に日中友  
好を推し進めていくことは、モ  
ンゴル人から見ればけつして友  
好的なものではない。中国とい  
う国に対し、とかく一元的な物  
の見方をしがちな日本人にとっ  
て中国をもっと複眼的に見てい  
くための重要な示唆を本書は随  
所に示してくれる。



『植民地としてのモンゴル 中国の官制ナショナリズムと革命思想』  
楊海英=著 勉誠出版  
2730円 ISBN978-4-585-22057-2